

Title	<紹介>山本一著『慈円の和歌と思想』
Author(s)	佐藤, 雅代
Citation	語文. 2002, 78, p. 57-58
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/69005">https://hdl.handle.net/11094/69005</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 紹介

### 山本一著『慈円の和歌と思想』

佐藤雅代

山本一氏の長年にわたる慈円研究の結果として上梓されたのが本書である。第一章から第十五章までは、慈円の和歌活動の問題点を、『拾玉集』を主要資料に建久期までの和歌活動、新古今期後鳥羽院歌壇と慈円、承元・建暦・建保・承久期の和歌活動というように各時期ごとに検討し、その思想的性格を説明しようとしたものである。第十六章から第十九章は、和歌研究以外の分野から慈円に向けられている関心について、和歌研究の成果を踏まえて応えようとした論考である。山本氏の高い批評精神とすぐれた分析能力が顕著に表れていると思われる章を中心に私見を述べてみたい。第九章「古今歌百首」の諸問題」では、『千五百番歌合』の際に、古今集歌を題として詠んだ百首について、慈円が古今集歌をどのように選択したのか、また、題とした古今集歌がどういう系統の伝本によるものであるのかを綿密に考証した上で、『古今歌百首』の跋を「古歌撰取・古典撰取を故意に誇張して模倣するというアイロニカルな意図である（本文二一四頁）」と分析している。第十二章「恋歌百首歌合（仮称）」と「厭離欣求百首」―隠遁と和歌―」では、「恋歌百首歌合」を構成する和歌について、「報いられぬ恋の苦しみをついに不毛と悟って仏道に赴く心境や、恋に対する情熱を仏道修行に励む心へと転換しようとする意図」を読みとろうとする。そして、これらの作品が和歌史的に孤立したのではなく、歌林苑から青年期の慈円へとたどり得るような、「恋から仏道へ」というテーマでの詠作行為の系譜を受

け継ぐものであることをも暗示している（本文二七二頁）と指摘する。また、西山隠棲の意義についても、慈円の政治的立場が必然化した「隠遁」であり、さらに政治活動の再開を前提とした「隠遁」でもあったが、それにもかかわらず（むしろそれ故にこそ）、仏教者としての自己確認と後世の救済という、切実な内面的要求とも結びついていた（本文二九二頁）とし、慈円の事例が中世思潮の解明につながるのと見る。第十四章「難波百首」とその和歌思想」では、「難波百首」を慈円の和歌観の多様性を示す作品であると認識し、和歌という文学形式がはらんでいる問題点自体の縮図であると捉えている。万象を詠もうとする素材拡大の要求と、伝統詩形としての優美さの確保の要求、即興性の尊重と推敲の必要性、宗教的（形而上学的）なものとの諷刺的（俗的）なものとの意外な親近性、これらの諸要素・諸問題を、慈円の作品や和歌観は必ずしも調和や統一には仕上げておらず、むしろあまりに多くを求めて破綻に瀕しているように見える（本文三四四頁）と考察している。ところで、山本氏の文献学的考証については、石川一氏の『慈円和歌論考』（笠間書院、一九九八年二月）に寄りがかかっているのではないかという点がやや気にかかる。例えば、第十三章「建暦三年日吉百首」の成立―仏教的和歌観の試行と屈折―」には、本章では、石川が示した把握に従って論を進め、この把握に私なりの立場からさらに具体性を与えてみたいと考える（本文二九四頁）とある。しかしながら、論理的で明快な考察に基づく本書が、石川氏の著書と補充しあうことによつて、今後の慈円研究の必読書となることは間違いないであろう。（和泉書院、一九九九年一月、文部省助成図書、四五六頁、本体価格一三〇〇円）

